

本名だけ見られたくない？ ～大学生の SNS 利用と名乗り

折田明子^{†1}

インターネットを介したコミュニケーションは、かつて匿名性が高いものと考えられてきたが、特に若い世代はスマートフォンによってソーシャルメディアを用いつつ身近な人とのやりとりを行っている。若い世代に対して、ネットを介したコミュニケーションにおける匿名性のリスクだけを伝えるのでは不十分ではないだろうか。の高い本稿では、大学生を対象とした調査から、SNS の利用においてどのような名前をどのように名乗っているのか、また見られたくない相手と名乗り分けの関係について考察した。その結果、回答者の多くは本名をフルネームで名乗っており、かつ同じ名前で使い続ける回答者も 18.5% にのぼったが、ネットのみのニックネームかつ使い分けるという回答者も 21.7% と、匿名性の有無は両極端な結果となった。一方で、親・兄弟や教員などには投稿を見られたくないという意向ははっきりしているものの、特に名乗る名前や名乗り分けとの関係において差はない結果となった。

University students' screen name on SNS

AKIKO ORITA^{†1}

Online communication has been thought to be anonymous, however, the young generation use social media by smartphones in order to communicate with their friends and classmates. According to our research on university students, over 40% are using their real name as screen name on SNS and 18.5% keep using the name, which means they are no more anonymous. On the contrary, 21.7% use pseudonym (online nickname) and change the screen names on every single service, which means they are still relatively anonymous. Also they don't want to be found by their family and faculties on Twitter, however, there are no significant difference in usage of screen name.

1. はじめに

インターネットを介したコミュニケーションは、相手の顔が見えない視覚的匿名性、ならびに名乗る名前の自由度（実名、仮名、匿名や名乗り分け）から、匿名性が高いものと考えられてきた。もちろん、今でもいわゆる「ネット炎上」では、実名を明らかにしている利用者に対して、複数の匿名（仮名）利用者が攻撃をしかけるといった現象が見られるし、普段と違う名前を使いながらプライバシーを守りつつセンシティブな相談をする例も見られる。

一方で、肌身離さずスマートフォンを持ち歩き、そのスマートフォンによって身近な人とコミュニケーションを取るといった行動は、現実の生活や人間関係をネットに拡張しているものとも見ることもできるだろう。スマートフォンによるインターネット利用は、特に 20 代や 30 代の若い世代で顕著であり、LINE 等のメッセージングアプリの利用もこの世代に多く、7 割から 8 割の利用者が毎日利用している[1]。コミュニケーションをとる相手が、既に会っているクラスメートや仕事仲間であるならば、仮にどんな名前を名乗っていても匿名性は存在しない。スマートフォンによる投稿であれば、返信のタイミング、投稿のタイミングから生活のリズムも浮かび上がることすらある[2]。若い世代へのリテラシー教育では、匿名性ゆえのトラブルや、匿名だと思っ

ていても本人が特定されるリスクについて教えられることが主であった[3]。

こうしたオンラインでのコミュニケーションにおいて、特にスマートフォン利用率が高い若い世代の利用者は、匿名性や、誰に何をみせ、誰に何をみせないかというプライバシーをどのように意識しているのだろうか。インターネットの利用のリテラシーを教えるにあたって、インターネットの匿名性のリスクのみに注意を払うのは現実的なのだろうか。そこで、本稿では大学生を対象とした調査を行い、若い世代の SNS 利用の名乗りについて考察する。

2. オンラインのコミュニケーションの現状

2.1 匿名性の高くないインターネット利用

インターネットを介したコミュニケーションは、匿名性が高いものとはもはや言い切れない状況にある。

たしかに、平成 26 年度の情報通信白書によれば、国際比較において日本では匿名（仮名）による利用が他の国よりも多く、実名登録が推奨されない Twitter では 75.1% が匿名（仮名）利用、19.4% が実名利用、5.5% が実名・匿名の複数アカウントによる利用であることが示されている[3]。

一方で、平成 27 年度情報通信白書によれば、実名登録が推奨される Facebook での実名利用率は 84.8%、無料通話アプリとして開始した LINE は 62.8% と高く、続いて写真共有サービスの Instagram が 31.9%、Twitter が 23.5% と続いている。また、実名の利用率は、年代によって大きな違いは見られな

^{†1} 関東学院大学
Kanto Gakuin University

い[4].年代別の利用率を見ると,20代ではLINEの利用率は62.8%と高く,Twitterは52.8%,Facebookは49.3%と続く.利用率が高いサービスにおいて実名利用率も高いことから,必ずしも匿名性が高いコミュニケーションのみが行われているわけではないという状況がうかがわれる.

2.2 ソーシャルメディアと名乗り

では,ソーシャルメディアはどのような名前が使われているのか.平成23年情報通信白書によれば,SNS利用において実名利用は20.9%,「現実世界の自分と結びついているハンドルネーム」の利用は30.8%,「現実世界の自分と結びついていないハンドルネーム」の利用は48.3%であり,SNSの利用に際しては,実名あるいは現実世界(実生活)での人間関係を継続できる名前が使われている傾向がある[5].

実名を秘匿していても,同一人物と分かる状態,すなわち複数の行為(投稿など)がリンク可能であれば,名乗っている名前のもとに一つのアイデンティティが存在する.実名であれニックネームであれ,名前をその都度変えるということは,コンテキストによってアイデンティティを使い分ける一つの方法であり,言い換えればプライバシーを守る使い方である[6].なお,折田(2013)の大学生を対象とした調査によれば,同じ名前を名乗るのと,その都度名乗り分けるのでは,おおむね半々に分かれているが,女子学生の方が名乗り分けるという回答が多いことが示された[7].

2.3 ソーシャルメディア利用目的

ソーシャルメディアはどのような目的で利用されているのか.ソーシャルメディアのサービスには,公開範囲の設定をしつつも複数の他者に対して投稿を開示する仕組みと,特定の相手(単数・複数)とのメッセージングをする仕組みが備えられている[8].

まず情報を発信したり拡散したりする行動については,平成27年情報通信白書によれば,20代のソーシャルメディア利用者のうち,過半数が情報発信(自ら何かを書いて投稿するなど)の経験ありと回答している(積極的な情報発信17.4%,発信するが閲覧の方が多く38.8%).一方で他者が書いたものを知人と共有する「拡散」については,20代の61.2%が経験あり,かつ21.7%はほぼ毎日行っていると回答している.

次に,身近な友人や知人との主なコミュニケーション手段としては,LINEなどのメッセージアプリが最多であり,20代では「日常のおしゃべりをする」(52.0%),「頼みごとをする」(42.3%),「悩みを打ち明ける」(40.1%)といった用途が多数であった.SNSでのやりとりでは,「感謝の気持ちを伝える」(11.6%),「抗議する」(11.5%),「悩みを打ち明ける」(10.2%)といった用途が多数であった.

なお,全般的なSNS利用について,20代の回答者の74.0%がトラブル経験ありと回答しているが,これは他の年齢層よりも低い割合であった.

2.4 特性の認知

ソーシャルメディアの利用者はソーシャルメディアの特性をどの程度理解して使っているのか.平成27年情報通信白書によれば,SNSの特性について「知っている」という回答比率は年代が上がるほど低くなっており,20代以下がもっとも高かった.20代以下の各特性に対する理解度は,図1の通りである.位置情報や公開設定など,自分が設定することについての認知度はおおむね高いが,他人がメールアドレスで検索すること,他人と共有したことが公開されること,他人にタグづけされることなど,他の利用者との関わりに関しての認知度は幾分低くなっている[4].

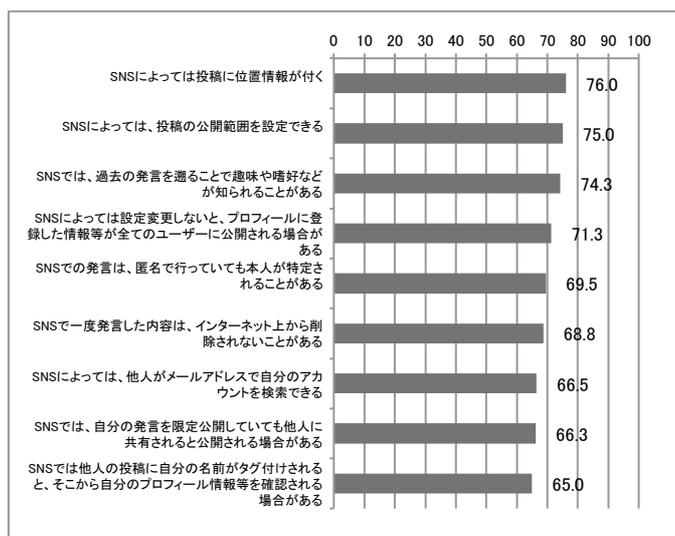


図1 留意すべきSNSの特性への認知度
 (平成27年情報通信白書を元に作成)

3. 大学生を対象とした調査

3.1 リサーチ・クエスチョン

日常的に利用するSNSにおける名乗りと,誰に見せたくないのかというプライバシー意識について明らかにするために,10代~20代という世代の学生に対し,アンケート調査を実施した.本調査のリサーチ・クエスチョンは次の通りである.

RQ1: SNSの利用において,どのような名前が,どのように名乗り分けられているのか?匿名性は保たれているのか?

RQ2: SNSの利用において,見られたくない相手がいる人は,どのような名前を名乗っているのか?

RQ3: SNSの利用において,見られたくない相手がいる人は,どのように名前を名乗り分けているのか?

名乗る名前の選択肢として、本名を「フルネーム」「名字のみ」「名前のみ」の3つに分類した。また、ニックネームも「普段の生活で使う」ものと「ネットのみで使う」ものの2つに分類した。これは、本名であっても本人を特定しづらいものや、逆にニックネームであっても本人を特定しやすいものがあると考えられるためである。

本人が特定でき、かつ同じ名前を名乗る状況（リンク可能性あり）では、匿名性はほぼ失われていると考えられ、また異なるコンテキストを混在させてしまうプライバシー侵害の可能性も考えられる。逆に、本人が特定しづらく、かつ意図的に名乗り分けているのであれば、匿名性は保たれ、かつプライバシーも守られている可能性がある。

「投稿を見られたくない相手」はプライバシーの意識をはかるために設定した。同じ情報でも、Aさんには見せていいがBさんには見せたくない、あるいはコンテキストによって許容できるかどうかは異なる。そこで、本調査では、誰に見られたくないかと、名乗り方・名乗り分けとの組み合わせから、プライバシーの意識があるかどうかをみる。

3.2 調査概要

本調査は、首都圏の四年制私立大学の学生を対象に実施した。ネット・コミュニケーションに関する講義の履修生を対象に、学内LMSによるウェブ調査という形態で実施した。概要は表1の通りである。

表1 調査概要

実施期間	2015年6月19日～25日
実施形式	学内LMSによるウェブ調査
調査対象	四年制私立大学学生 (ネット・コミュニケーション履修生)
有効回答者数	99 (回答率 44.6%)
回答者内訳	男性 63 (63.6%) 女性 36 (36.4%)
利用サービス	LINE 100% Twitter 82.8% Instagram 54.5% Facebook 34.3% Mixi 4.0% その他 9.1%

回答者全員がLINEを利用していた。次に利用者が多かったのは、Twitterであり、実名登録を定めているFacebookの利用者は3割強にとどまった。

利用しているサービスと性別との関係を見たところ、Twitterは女性97.2%、男性76.2%が利用、Instagramは女性77.8% 男性39.7%で、いずれも有意差がみられた（カイニ乗検定 $p < .01$ ）。

3.3 結果

(1) 名乗る名前の種類

選択肢は表2の通りである。本名フルネームは、普段の生活で使っている上、検索によって探すこともできるため、もっとも本人特定の可能性が高いものと位置づけた。本名であっても、名字のみ、名前のみであれば本人を特定する可能性は低くなる。また、ニックネームに関しても、普段使っているニックネームであれば、知人にとって本人特定の可能性は高くなる。これらの選択肢から、名乗っている名前を複数回答で聞いた。回答結果は図2の通りであった。本名（フルネーム）が最多で40.4%を占めており、もっとも匿名性が高い「名無し」で3.0%にすぎなかった。名乗る名前の選択には、性別による有意差は見られなかった。

表2 名乗る名前の選択肢と本人特定可能性

低 ← 本人特定可能性 → 高		
「名無し」	本名(名前)	本名(フルネーム)
	本名(名字)	
	ネットのみニックネーム	普段のニックネーム
	特に決めず	

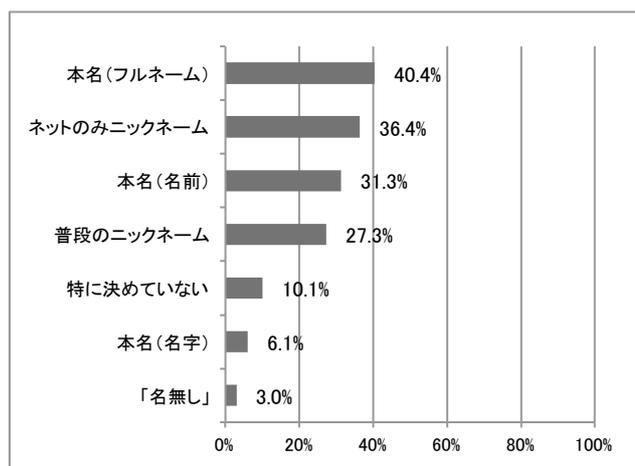


図2 名乗る名前の種類 (MA)

(2) 名乗り分けの有無

次に、サービスごとの名前の名乗り分けについて聞いた結果は図3の通りである。回答者の約7割は意図的に名乗り方を決めており、どのサービスでも同じ名前を使うという回答が36.4%、サービスごとに変えるのが33.3%と同じ名前を使う方がやや多かった。

クロス集計の結果、性別による有意差はみられなかった。名乗る名前の種類との関係は表3の通りである。同じ名前を名乗る（リンク可能性あり）の群においては、本名フルネーム（本人特定可能）が47.2%（回答者全体の18.5%）と最多であり、普段のニックネームが27.8%（回答者全体の10.9%）と続いた。サービスごとに使い分ける（リンク不能）群では、ネットニックネーム60.6%（回答者全体の21.7%）が最多で

あった。名乗る名前との組み合わせでは、ネットニックネームとの関係においてのみ有意な差がみられた。

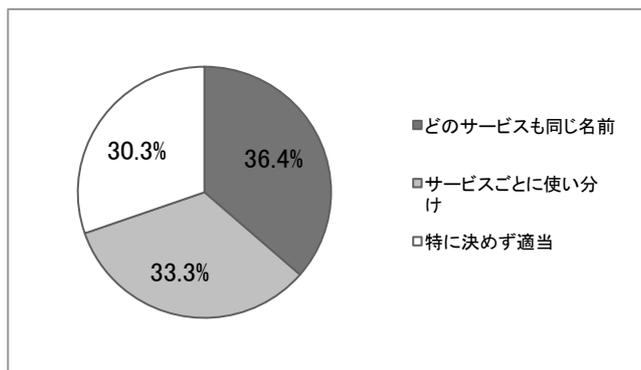


図 3 名乗り分けの有無(SA)

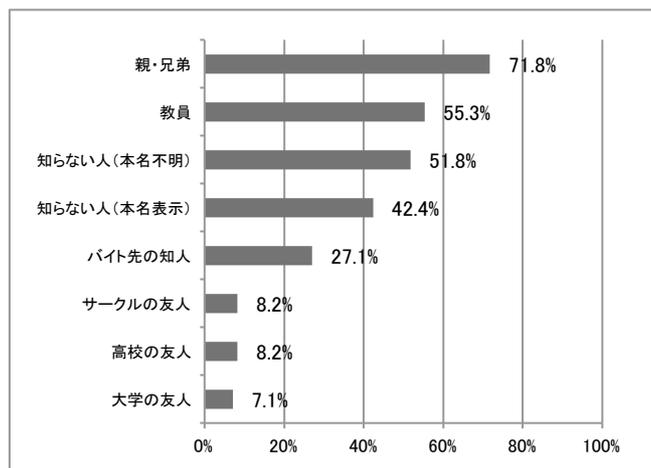


図 4 Twitter 投稿を見せたくない相手 (MA)

(3) Twitter 投稿を誰に見せたくないか

最後に、Twitter の利用者を対象に、Twitter の投稿を誰に見せたくないかを聞いた。Facebook は公開範囲を友人のみ、カスタムと設定することができ、LINE はチャットの相手を選ぶことができ、タイムラインも友達限定であるが、Twitter ではプロテクトアカウント（鍵付き）にしない限り投稿は公開され、誰でも見ることができるため、Twitter を対象とした。

結果は図 4 の通りである。親・兄弟といった家族が 71.8% で最多であり、教員 (55.3%) が続く。知らない人の場合、本名が不明である方が抵抗感が高かった。大学・高校・サークルの友人はおおむね回答者が少なかった。

クロス集計の結果、性別と名乗る名前種類の有意差は見られなかった。名乗り分けの有無とのクロス集計の結果は表 4 の通りであった。見られたくない相手としての「バイト知人」のみ他の回答と有意な違いがみられ、「サービスごとに使い分ける」との組み合わせが最多となった。

表 3 名乗り分け(SA)と名乗る名前 (MA) のクロス集計

	同じ名前			サービス毎に使い分け			特に決めず		
	度数	(内訳)	全体の%	度数	(内訳)	全体の%	度数	(内訳)	全体の%
本名フルネーム	17	47.2%	18.5%	12	36.4%	13.0%	11	47.8%	12.0%
本名名字	0	0.0%	0.0%	3	9.1%	3.3%	3	13.0%	3.3%
本名名前	7	19.4%	7.6%	12	36.4%	13.0%	13	56.5%	14.1%
普段のニックネーム	10	27.8%	10.9%	9	27.3%	9.8%	8	34.8%	8.7%
ネットニックネーム	7	19.4%**	7.6%	20	60.6%**	21.7%	9	39.1%**	9.8%
名無し	0	0.0%	0.0%	2	6.1%	2.2%	1	4.3%	1.1%
	36		39.1%	33		35.9%	23		25.0%

(** χ^2 乗検定 $p < .01$)

表 4 名乗り分け(SA)と見られたくない相手(MA)のクロス集計

	度数	親兄弟	大学友人	高校友人	サークル友人	バイト知人	教員	知らない人(本名表示)	知らない人(本名不明)
		(内訳)	(内訳)	(内訳)	(内訳)	(内訳)	(内訳)	(内訳)	(内訳)
同じ名前	17	2	1	1	6	12	9	13	
		27.9%	33.3%	14.3%	14.3%	26.1% **	25.5%	25.0%	29.5%
		20.0%	2.4%	1.2%	1.2%	7.1%	14.1%	10.6%	15.3%
サービス毎に使い分け	23	3	4	4	14	20	14	16	
		37.7%	50.0%	57.1%	57.1%	60.9% **	42.6%	38.9%	36.4%
		27.1%	3.5%	4.7%	4.7%	16.5%	23.5%	16.5%	18.8%
特に決めず	21	1	2	2	3	15	13	15	
		34.4%	16.7%	28.6%	28.6%	13% **	31.9%	36.1%	34.1%
		24.7%	1.2%	2.4%	2.4%	3.5%	17.6%	15.3%	17.6%

(** χ^2 乗検定 $p < .01$)

4. 考察

本節ではリサーチ・クエスチョンを元に結果を考察する。

RQ1: SNS の利用において、どのような名前が、どのように名乗り分けられているのか？匿名性は保たれているのか。

名乗っている名前の種類については、本人特定性が高とも高い「本名フルネーム」の使用が最多であり、本人特定性は低い「ネットのみのニックネーム」がそれに続いていた。匿名性の高い「名無し」の利用はほとんどみられなかった。本名はフルネーム、名前、名字の順であり、違う用いられ方をされていることが推測できる。

名乗り方については、3割程度が特に意識していなかった。意識している内訳では、同一人物と分かる、すなわちリンク可能性のある「同じ名前を名乗る」が、リンク不能な「サービスごとに変えている」よりもやや多かった。

両者の組み合わせから見ると、本人を特定できる名前（本名フルネーム）で、リンク可能（同じ名前を使う）という利用が全体の18.5%を占めていた。匿名性がほとんど無い使い方である。一方、本人が特定しづらい名前（ネットのみのニックネーム）かつリンク不能（名前をそのつど変える）のは、全体の21.7%である。これは逆に匿名性を保つことができる使い方である。特に、サービスごとの使い分けとネットのみのニックネーム利用者の組み合わせは、他の組み合わせとの間に有意な違いが見られることから、意図的に名乗る名前と名乗り変えを考えて使っている可能性も考えられる。

RQ2: SNS の利用において、見られたくない相手がいる人は、どのような名前を名乗っているのか？

見られたくない相手と、名乗る名前の種類の間には有意差はみられなかった。見られたくない相手を想定して名乗る名前を決めていることを示す結果は得られなかった。

RQ3: SNS の利用において、見られたくない相手がいる人は、どのように名前を名乗り分けているのか

見られたくない相手としては、「親・兄弟」が最多、「教員」がそれに続いた。普段コミュニケーションをはかっているであろう友人たちに対する抵抗感は低かった。Twitterを前提としているため、「知らない人」という選択肢を入れたが、本名を表示している人の方が、表示していない人よりも抵抗感が少なかった。家族という身近な相手に対する抵抗感が最多でありつつも、知らない人であれば匿名性の高い状態（仮名）より本名表示の方が抵抗感が少ないという結果であった。

名乗り分けの関係をみると、「バイトの知人」のみ有意な差があり、サービス毎に使い分けしているという回答との組み合わせを選んだ割合が多かった。その他の対象では、名乗り分けとの関連において有意差はみられなかった。

誰に見られたくない、という意識はあるものの、どのような名前を名乗るのか、あるいはどのように名乗り分けるの

かという行動との関連は本調査からはほとんど見られない結果となった。このことから、プライバシーに関しては、名乗る名前および名乗り分けのどちらにおいても、意識的にコントロールはできていない可能性がある。

5. おわりに

本稿では、大学生を対象とした調査から、SNS 利用における名乗りとプライバシー意識について考察した。自らの名乗りにおいても本名（フルネーム）が多数を占めるのみならず、公開したくない相手としても、本名を知らない相手の方が抵抗感が高い結果となった。

インターネットを介したコミュニケーションにおけるトラブルは、匿名性の高さによるものだと考えられてきたが、若い世代の利用を見ると、本名や日常生活を反映した名前による利用が主になりつつある傾向が見えてくる。今後、ネットのリテラシー教育を行う際にも、匿名性のリスクだけでなく、同じ名前を使い続けることや、プロファイリングによって本人特定がなされてしまうリスク、誰になら見せてよいかという情報公開範囲のコントロールといった項目も重視する必要があるのではないだろうか。

本稿では、それぞれの項目との関わりが、どの程度意識的になされているかを見ることはできなかったため、今後は、こうした名乗りの傾向と、プライバシーのコントロールとの関係性についても明らかにしたい。

謝辞 本研究の一部は、科研費若手 B（課題番号：）の助成を受けたものである。また、研究利用の条件のものと、アンケートに回答してくれた講義の受講生に感謝する。

参考文献

- 1) LINE 株式会社 : LINE 2015 年 4-9 月媒体資料 (2015)
<https://linecorp.com/ads/pdf/8CCCEF52-B730-11E4-BEB8-ED3AF3F15F22>
- 2) 折田明子 : SNS に集約する情報 : ネットワーキングからライフログへ。情報の科学と技術 Vol.61 No.2 pp.70-75 (2011)
- 3) 総務省 平成 26 年情報通信白書
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/index.htm>
- 4) 総務省 平成 27 年情報通信白書
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/h27.html>
- 5) 総務省 平成 23 年情報通信白書
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h23/index.html>
- 6) 折田明子:第 9 章:インターネット上で名乗る名前とプライバシー」公文俊平・大橋正和編著『情報社会のソーシャルデザイン:情報社会学概論 II』NTT 出版(2014)
- 7) 折田明子.日常生活で利用する SNS でみられる名乗りについて.情報処理学会 DPS156/GN89/EIP61 研究報告 No.26 (2013)
- 8) 津田大介: 動員の革命~ソーシャルメディアは何を変えたのか.中公新書ラクレ (2012)